

① プレイディみかこ 著

『ワイルドサイドをほっつき歩けー  
ハマータウンのおっさんたち』  
(筑摩書房)

2019年のベストセラー『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』に続く、英国在住の「おっさん」を描いたエッセイ集です。

保育士で作家でもある著者の友人・知人のおっさんたち(たまにおばさんたち)にとっては、ニュースで見るEU離脱や近年の緊縮政治、新自由主義による弊害も生活の一部。ちょっとした笑いや涙とともに語られる愛すべきおっさんたちの人生を垣間見る第1章と、現代英国における世代、階級、酒事情を解説した第2章で構成される本書によって、英国の労働者階級が抱える問題を身近なものとして感じることができます。(E. H.)

302.33 ||Bra

③ 宮下洋一 著

『ルポ外国人ざらい：EU・ポピュリズムの現場から見た日本の未来』  
(PHP研究所)

昨今、人種差別や移民による事件が、メディアに度々上がっています。移民を多く受け入れてきたEUでも排斥運動が激化しているといえます。

欧州在住のジャーナリストである著者は、イギリスを含む欧州6カ国の内情や移民に対する考え方を半年にわたり取材しました。見えてくるのは、移民やEUと足並みを揃えることで自国の文化が圧迫されることへの危機感、そして支持を集めている排外主義ポピュリズムなど埋め難い軋轢。

本書では、世界4位に並び在日外国人39万人を擁する日本も「隠れ移民大国」として取り上げています。欧米と比べ移民に対する意識は低くとも、単一民族でポピュリズムが台頭しにくい国柄が長所です。著者は日本が将来、欧米の苦い経験も教訓にして、移民との理想的な共生社会を築くことを願っています。(H. I.)

334.43 ||Miy



② 梅内美華子 監修

『日本の美しい言葉辞典』  
(ナツメ社)

日本語には、自然の情景や、動植物、色などを独特に表現した和名があります。本書では、タイトル通りの美しいそれらの言葉を、カラー写真と共にわかりやすく紹介しています。

雪中花、君影草、六つの花、夕星、春告げ鳥、緑の糸、漁り火、ゆかりの色……いずれも豊かな自然や、暮らしの中から生み出された言葉です。これらが何を指すのかは、実際に本を開いてみてください。添えられた由来からは、人々の感性が伝わってくるようです。言葉もまた、日本古来の伝統美の一つと言えるかもしれません。

グローバル化が進む昨今、カタカナ言葉の中に埋もれがちになる日本古来の言葉の響きを、再発見できる一冊です。(N.T.)

814 ||Ume

④ ランドール・マンロー 著 吉田 三知世 訳

『ハウ・トゥー バカバカしくて役に立たない暮らしの科学』  
(早川書房)

この本で書かれないかなることも、ご家庭では試さないでくださいーそんな注意書きから突然始まるこの本…“HOW TO”なので、～をするには？と始まりその手法が説明されているのだが、これが悉く意表を突いてきて、面白い。“友だちをつくるには？”とページを捲ると物理学の概念「平均自由行程」の説明が始まり、“ピアノを弾くには？(すみからすみまで)”と見ると、88鍵の鍵盤が235鍵になっちゃった…

何それ、どういうこと！？と思った人は是非、この本を手取るべし。

世の中にありふれた、なぜ？を追求することで私たち人間は多くを学び、そして新しい「なにか」を創造していくのです。(M.T.)

404 ||Mun

⑤ 梨木香歩 著

『ほんとうのリーダーのみつけた』

(岩波書店)

人間はひとりで生きていくことは難しく、多くの人は様々な集団の中に身を置くことになります。ある集団のなかで生きていくと集団心理というものがあるのが生まれ、個人はその集団の多数派と違う意見を持つことが難しくなります。それでも意見を持つことは個人の自由のはずなのに、その個人の意見まで捻じ曲げて多数派に合わせようとするプレッシャーが「同調圧力」です。本来自然に発生するはずの愛国心や絆という言葉が政治家の口から発せられ、まるで戦時下のような緊張を強いられている今の若い世代に、『西の魔女が死んだ』の著者が伝えたいこと。私たちは何を指針に生きてゆけばいいのか。迷ったときに手にしたい一冊です。(N.S.)

914.6 ||Nas



⑥ ディーリア・オーエンズ 著 友廣純 訳

『ザリガニの鳴くところ』

(早川書房)

1950年代のノースカロライナ。偏見や差別が現代よりもあからさまであった時代にたった一人で湿地に暮らす少女。あるとき近くで死体が発見され、事故か他殺か、静かな村は騒然となる。事件を機に、弱者への侮蔑が憎悪に変わり、容疑者にされてしまうが――。

本書は動物学者の著者が69歳で初めて執筆した小説で、2019年に全米ベストセラーになりました。

主人公をめぐる環境が困難になっていくほどに、大自然と共に生きる姿は強く眩しく、読者を魅了していきます。

ミステリーの伏線はやがて回収され、真相はあきらかに。読み終えて彼女の人生について、誰かと語り合いたくなる、そんな一冊。(Y.K.)

933.7 ||Owe

⑦ タナハシ・コーツ 著 池田年穂 訳

『世界と僕のあいだに』

(慶應義塾大学出版会)

アフリカ系アメリカ人のジャーナリスト、タナハシ・コーツが息子に書いた手紙という形をとる本書は、黒人に対する人種差別と暴力が渦巻くアメリカで黒人として生きることの現実を伝え、2015年に全米図書賞を受賞しました。

「Black Lives Matter」運動は日本でも大きな話題となっていますが、日常的に暴力に怯える生活は想像を絶するものです。また、「人種」という概念を作り出し、「白人」が「黒人」を搾取してきたアメリカの歴史は根の深い問題と言えます。

“Everything alters, but never changes.” という著者の父親の口癖の通り、構造的な人種差別は簡単に解決する問題ではありません。しかし、あらゆる場所で分断が進む現代にあって、世界と自分のあいだに引かれた線について考えることから、全ては始まるのではないのでしょうか。(N.O.)

936 ||Coa

⑧ 浅田次郎 著

『竜宮城と七夕さま』

(小学館文庫)

航空会社の機内誌で17年にわたって連載中のエッセイをまとめた本書は、言わずと知れたベストセラー作家による第4弾。旅行先での出来事や食べ物、日常のふとした場面で抱く疑問など、40編が収められています。

巻頭の「唸る男」。どんな男たちがどこでどう唸るのでしょうか。著者の友人による納豆の食し方を想像すると、身震いが出そうになる「納豆礼賛」。著者が散歩中にミズナラの木の根元で発見し、欣喜雀躍して手に取ってみたものは…(「トリュフの味」)。

少し時間が空いたときに、気軽に手に取れる一冊です。(E.H.)

914.6 ||Asa